



◎賞められるのは大嫌い……………	1
◎一家の誉れより御国の為め……………	6
◎此方は咎人で御座れば速かに縄を掛けられたい……………	13
◎ズドンと響いた鉄砲の目覚し……………	19
◎自分の歳は確と判りかねる……………	27
◎吉之助の本願は何……………	33
◎其方は強力で武道に達して忠義な奴だ……………	38
◎撃とうと思う獲物は目の前……………	46
◎二度目の遠島……………	51
◎有り難き恩典……………	55
◎拙者の芸当は剣舞……………	59
◎幸いの替え玉金と鉛……………	69
◎名残惜しい別れ……………	75
◎国家の為めには家をも身をも御座らぬ……………	79

- ◎ 最中の月影に落花狼藉…………… 85
- ◎ 不徳不義の徒者とは聞き捨てならぬ一言…………… 92
- ◎ 暫らく待たつしやい役目によつて聊か調べる…………… 101
- ◎ 捕えられたのは甚だ愉快…………… 110
- ◎ 重大な使者の役目…………… 114
- ◎ 執念深き役人は何処までも追跡する…………… 121
- ◎ 悪魔の手はいよ／＼近きましたぞ…………… 126
- ◎ 最早運命も是れ迄た…………… 134
- ◎ 女の黒髪象でも繋ぐ…………… 138
- ◎ 血祭に何うなりともして殺せ…………… 144
- ◎ 忍んで歩く足許を棒で払った…………… 149
- ◎ 竹槍の先には二ツの生首…………… 155
- ◎ タツ／＼大変だ…………… 159
- ◎ 此上は戦いより外にありませぬ…………… 166

◎ 胡蝶丸の出帆 <small>こちようまる しゅっぱん</small> .....	172
◎ 居眠りするの <small>いねむ</small> も <small>わけ</small> 訳が御座る.....	178
◎ 待 <small>ま</small> たっし <small>ま</small> ゃい <small>と</small> 通 <small>と</small> す <small>こと</small> 事ならぬ.....	183
◎ 本望成就 <small>ほんぼうじゆうじゆ</small> の時 <small>とき</small> は <small>ちか</small> 近づ <small>か</small> つ <small>た</small> いた.....	189
◎ 城山 <small>しろやま</small> 々 <small>さん</small> 頭 <small>とう</small> の夕嵐 <small>ゆふあらし</small> .....	196
解説 加来耕三.....	205

西鄉隆盛

◎ 賞められるのは大嫌い

嶺の紅葉は明け初める朝暾をうけて、さらでも花やかな色に輝々とした光りを添え、峙放れた鳥の声は杜から杜に伝わって、暁告ぐる鐘の音と和し、今までは沈みに沈んだ寂寞の天地も俄かに活気を呈したかと思わしめた時、遙かに鹿兒島の城下を離れた此上野園村へ、草葉の露を馬蹄に散らして駈け付けた一人の武士がある。

村の入口に着いて、折柄耕作に出ようとすると二三の百姓に何か尋ねる有様であったが、まも無く駒を進めたのは曲り屈った横道の、陋くろしき荒屋であった。見れば中には此家の主人であろう、年の頃五十前後の人が、朝の支度に余念なく立ち働いて居る側に、十七八歳とも見える少年を頭に、其他二人の弟らしいのが雑って甲斐ぐしく手伝うて居る様、広くもあらぬ家の内だけに悉く見え透いて居る。彼の武士は暫らく此の体を見て居ったが、聴て馬よりヒラリと下り、手綱を傍らの立木に繋いでツカくと門口に足を運んだ。「聊か物を尋ねる。西郷吉蔵と云うのは此処か」と云う声に主人は何気なく眺めたが、

其風体の卑しからぬに少なからず驚いた様子。「へッ、私は御尋ねの吉蔵でござります。御見受け申せば御家中の御歴々と御察し致しまするが、何か御用でも……」「オ、御身が吉蔵であるか。拙者は当国の御領主、島津公の御親縁に居らせられる和泉殿の近侍、岸本小十郎と申す者である。此度殿の御内意を受け、聊か御意得たいことがあつて参つた」「へエッ、和泉様から卑しき私しに、如何なる御用かは存じませんが勿体至極も無い……殊に早朝より御歴々の方が態々の御越し、御使い柄何んともはや恐れ入ります。誠に陋くろしゆうござりますが、何うか先ず是れへ御通りを願ひまする」「アイヤ〜決して懸念無用」と、詞静かに云うた後、やおら上り口に腰を掛けた。「夫れでは余りの端近、恐れ入りまする」「イヤ〜、決して構わつしやるな……時に卒爾ながら尋ねるが、吉之助とやらは居られるか」「へエッ、吉之助……如何にも居りまする。が何か御家中の方へ無礼でも致しましてござりまするか。何分小供の事……」「イヤ〜、実は殿よりの御内意は其者へ下がったのである」「へエー、ドツ、何んなことで……」「御身も聞いたであらう。一昨日鬼啼谷の件を……殿には非常の御感服であるぞ。かね〜只の小供では無いと云う噂は御耳にせられては居られた御様子なれども、今回の事、其胆力と云い、宏量の氣

と云い実(じつ)に大人(おとな)も及(およ)ばぬ致(いた)し方(かた)とあつて是非(ぜいひ)目(め)通りへ召(め)し連(れ)れよとの事(こと)である。尤(も)も此(こ)の儀(ぎ)昨日(けふ)仰(おほ)せられたので、直(ただ)ちに出(で)ようと存(ぞん)じたなれど、早(そう)朝(ちよう)より山(やま)荊(かぶ)りに趣(おもむ)かれるこのことを承(うけたま)わつたにより、殊(こと)更(さら)ら早(そう)朝(ちよう)に参(ま)つた。御(おん)身(み)も宜(よ)い子(し)息(そく)を持たれた。羨(うらや)ましゆう思(おも)うぞ」「チョツ、一寸(ちよつと)御(おん)待(まち)ちを願(ねが)います。全(ぜん)体(たい)吉(きち)之(の)助(すけ)は如何(いか)致(いた)しましたので……恐(おそ)れながら私(わたく)し何(なに)事(ごと)も聞(き)き及(およ)びませぬが何(なに)か御(おん)間(ま)違(ちが)いでも……」「オ、御(おん)身(み)にまで秘(ひ)して居(お)つたか。いよ／＼其(その)心(こころ)根(ね)に感(かん)服(ふく)を致(いた)した……何(なに)は兎(と)もあれ一寸(ちよつと)此(こ)の処(ところ)まで呼(よ)ばれたい」「ハッ……、併(ひ)し何(なに)分(ぶん)にも無(む)作(さく)法(ぽう)者(じや)でござりますれば万(まん)一(いつ)失(しつ)礼(れ)致(いた)しましては……」「イヤ／＼苦(くる)しゆうござらぬ是非(ぜいひ)に」「へ、ッ」

藪(やぶ)から棒(ぼう)の話(はな)しに吉(きち)蔵(ざう)は怪(あや)しみ且(かつ)つ驚(おどろ)いたが、其(その)言(こと)葉(は)の様(よう)子(すけ)では吉(きち)之(の)助(すけ)の事(こと)について何(なに)かは知(し)らぬが賞(ほ)めて居(い)るとは知(し)つた。で心(こころ)を休(やす)めたのみか世(よ)の中(なか)に子(こ)を賞(ほ)められて悦(よろこ)ばぬ親(おや)は無(な)い。訝(いぶ)かしみながらも心(こころ)の内(うち)では窃(ひそ)かに悦(よろこ)んで直(ただ)ちに吉(きち)之(の)助(すけ)の名(な)を二(に)度(ど)三(さん)度(ど)呼(よ)ぶと、声(こゑ)に応(おう)じて出(で)て来(き)たのは前(ぜん)刻(こく)来(らい)二(に)人(にん)の弟(あとうと)らしいのを相(あ)手(て)に家(か)事(じ)に立(た)ち働(はたら)いて居(お)つた十(じゆ)七八(さい)歳(さい)とも見(み)える少(しょう)年(ねん)で、吉(きち)蔵(ざう)の後(うしろ)に手(て)をついて座(すわ)つた。「父(ちち)上(じやう)御(おん)呼(よ)びでございますか」「オ、」と吉(きち)蔵(ざう)は詞(ことば)をかけんとするを賺(すか)さず遮(か)つた岸(きし)本(もと)「オ、御(おん)身(み)は吉(きち)之(の)助(すけ)であるか。

聞き及ぶに一昨日は鬼啼谷に於て大層な手柄を致された趣き、今更らながら感服を致したぞ」と云うを訝しげに眺めた吉之助「御言葉ではございませぬが、左様の儀は決してございませぬ。失礼ながら何かの御聞き誤まりかと存じますが」「アコリヤく最早秘するには及ばぬ。昨日八幡の神官稻生より委細を聞き及んで居る。就ては御領主の御親縁、和泉公には是非対面を致したいにより召しつれよとの事である。是れより同道致すにより仕度を致されたい」「御用がござりますれば父上の御許しを受けましたる後、何れへなりとも御供を仕つりますなれども、私は何も手柄を致しました覚えはござりませぬ」「イヤく、一昨日鬼啼谷に於て、三名の荒男を挫ぎ、稻生の娘秋子なるものゝ危難を救われしのみか、尚打ち懲すべき荒男共に将来を戒めて放ち与え、且つは御身の手柄を隠されん為め、殊更らに口止をせられ、姓氏も名乗れずに立ち去られたとやら、人は無き武名までも誇らうとせられる当今の世に、さても胆力と云い性質と云い、若年に似ず天ツ晴れ見上げたる志し、ほとく感服の外ござらぬ」

岸本が語つた意外の言葉を、初耳に聞いた吉蔵は呆れた。呆れて暫らく兩人の顔を眺めたまゝ一言も発し得ぬ。が吉之助は平気でニッコと笑て「あのような事を事々しく手柄な

ぞと御賞めに預かつては世の中は闇になります。悪い奴に苦しめられる弱い者は助けるのは普通。又た悪い奴でも改める色があれば夫れを戒めるは人の道かと存じます。其普通の事をなし人の道を踏む者を珍らしそうに賞めるようでは悪い者はいよく邇蔓り、善いことが廢るでございましょう。一昨日の事は畢竟普通の事を致しまして、人の道を踏んだに過ぎませねば、別に事々しく申し上げる程の事はございませぬ。又た其節更ら心あつて姓氏を秘したのもございませぬ。斯ような事を手柄として御賞め頂きましては私し心がすみませぬのみか、失礼ながら聊か御見当が違うかと存じます」とジロリと岸本を眺めて尚も言葉をついだ。「若し又た此の事が人を救うた為めとの御賞めでございませぬれば、私共よりまだく御賞めを蒙むらねばならぬ者がございします。私は僅かに一人の人を救うたに過ぎませぬが、田を作る百姓は普通の事をして国々の沢山の人を救うて居るではございませんか。今日百姓が働いて居る為めに多くの人々が何れほど命を繋いで居るかも知れませぬ。さすれば是れ等の者を充分御賞めにならねばならぬ筈でございませぬけれども、其百姓の名を殊更ら尋ねる人もございませぬば、御賞めになつた大名も今に聞かぬでございませんか。大体かゝる事を大層らしく御賞めになるのは恐れながら御考

え違いかと存じます。斯ようなことで私しは御賞めに預るのは大嫌いでございます」  
余りに大胆な言葉に今は吉蔵堪えかねたか「是れ、何んと云う失礼な事を申し上げる」と一言吉之助をたしなめて、さて岸本に「何分小供の事でございませうれば、無作法の儀何卒御聞き流しの程御願ひ致します」と恐るゝ云うを軽く首肯いた岸本「否、決して咎めん。只今の申す処尤もである。聞しに勝る心掛け、ほとゝ感心いたした。して当年何歳に相成る」と穏やかに聞くを、「御覧の通り軀は大きゆうございませうが、当年漸く十五に成りました処で……」と吉蔵は答えた。「ナニ、十五……フーム、見受くる処十七八歳にも思われるが遅しい身体であるの。何はともあれ殿の御召しであれば吉蔵、御身付き添いの上、直ちに出来るよう」「へ、ッ、恐れ入りまする」

### ◎一家の誉れより御国の為め

後年我國の趨勢に感ずる処あって、征韓の大義を唱え、時の宰相に容れられざる為めに、遂に城山々頭の露と消えた大西郷は美に此の吉之助であつて、其意気は幼時に於て既に凡庸ならなんだ。其生長の大略を云うと、祖は遠く南朝の忠臣菊池肥後守に出で、其幾

代かの孫に至つて薩摩に下り、何日しか微禄を以て公事に仕えることゝなつたので、最初菊池氏から吉蔵に至るまで十六代を重ねたと云うことである。吉之助は吉蔵の長子で次に新吾、小兵衛の二弟があつた。

天性の慧才は四五歳の時から芽して居つたが、一を聞いて十を知るの明は其時から含まれて居つたそなた。のみならず事に當つて心細かく、機に望んで胆の大なる事は世の中の子供と全く趣きを異にして、其鳳雛なることは余所の見る目にも点頭される程であつたから、吉蔵も身は微禄ではあるが其前途に多大の望みを囑し、七八歳の頃から読書を藩の儒者松本金兵衛に、武を同じく岩本某に托して教えを乞わしめると、自然に備わる資性は益々敏く、数年ならずして神童の名は藩中に聞えるに至つた。が其性の敏捷なるだけ總ての事に於ても其才は動いた。学事武芸の習得するもの以外に於ても能く是れを察した。従がつて父吉蔵が困難なる家計の内から、是れ等の資を割かれることも元より知つて居る。又た修業中の自分に財物の乏しいを聞かしめぬため、殊更ら有り余るが如く装われ居る心の苦しさも知つて居る。で心では是れ等に充分の感謝を以て迎えて居つたが、夫れを現わせば反つて父の心に悖ると思ふ所から、少しも夫れらしい色を見せなんだ。が余財の無い

為め時に父の苦しげな様子を窺う事も尠く無いので、夫れとは云わぬが、名を精神の練磨と云うことにかつて、学業の余暇程遠からぬ山々に分け入り、枯木枯柴を持ち帰つては其幾分かの補いとして居つた。

処が何辺の嶺も紅葉の錦を飾つた暮秋の或る日のこと、思わず山深く分け入つたため、其一荷となつた頃は釣瓶落しの秋の日は何時しか暮れ初めて、皎たる月は既に山の端に照らす頃となつた。が、若年とは云え性来の強力に、聊かなりとも鍛練の武がある吉之助、仮令虎狼の難はあるとも敢て意とはせんが家には父母あり、定めて待ち詫び給わんと思た処から、遽かに足を早めて帰途につこうとする時、遙か彼方に當つて人の救いを求める声がか山彦に響いて聞えた。元來扶弱の氣に富んだ彼れ「さては」と思うた間も無く、負うたる背の荷を傍らに解き捨てたるまゝ、声を便りに韋駄天走りとなつて駆け付けると行く手の細道より僅か離れた木蔭の下に、何辺よりか誘拐されたらしい一人の婦人が、今しも二人の荒男の爲めに苦しめられようとして必死の声を絞つて居る処であつた。

婦人に近づくと男子の恥とした薩摩の国風、殊に此の人の所行を見ては壮俊の吉之助少しも猶予をすべき筈が無い。サツと飛び込むが早いか両の拳を固めて手酷く其二人の横

解 説

加来 耕三

(歴史家・作家)

立川文庫の成立

立川文庫は、一世を風靡した庶民の教養であり、当時の最大の娯楽であった。

明治四十三年（一九一〇）から、関東大震災後の大正十三年（一九二四）にかけて、出版の中心・東京ではなく、大阪の立川文明堂（現・大阪府大阪市中央区博労町）から刊行されたのが、このシリーズであった。発行者は、兵庫県出身の出版取次人で立川文明堂の社主・立川熊次郎である。したがって、一般には「たちかわ」と言い慣わされているが、本来は「たつかわ」と読むのが正しい。

「文庫」とは、その名のとおり、小型の講談本である。判型は四六半切判。定価は一冊、二十五銭（現在なら九百五十円〜一千円ぐらい）だった。総刊数二百点近く、のべ約二百四十の作品を出版し、なかには一千版を重ねたベストセラーもあった。

青少年や若い商店員を中心とした層に、とくに歓迎され、夢や希望、冒険心を培い、ひいては文庫の大衆化、大衆文学の源流の一つとも成った。立川文庫の存在は、その後の文学のみならず、演劇・映画（日本で大規模な商業映画の製作が始まったのは明治四十五年、日活の創業から）など、さまざまな娯楽分野にも多大な影響を与えている。

——スタートは、単純なものであった。

もと旅回りの講釈師・玉田玉秀齋（二代目 本名・加藤万次郎）の講談公演を速記した「速記講談」であった。が、やがてストーリーを新たに創作し、講談を書きおろすようになる。いわゆる、「書き講談」のはしりであった。

立川文庫では、著者名として雪花山人、野花（やか、とも）散人など、複数の筆名が用いられているが、すべては大阪に拠点をおいた二代目・玉田玉秀齋のもと、その妻・山田敬、さらには敬の連れ子で長男の阿鉄などが加わり、玉秀齋と山田一族を中心とする集団体制での制作、共同執筆であった。

その記念すべき第一編は、『一休禅師』。ほかには『水戸黄門』『大久保彦左衛門』など、庶民にも人気のある歴史上の人物が並んでいたが、何ととっても爆発的な人気を博したの

は、第四十編の『真田三勇士 忍術之名人 猿飛佐助』にはじまる「忍者もの」であった。

無論、猿飛佐助は架空の人物である。しかしこの猿飛佐助をはじめとする忍者は、それぞれのキャラクターと、奇想天外な忍術によって好評を博し、立川文庫の名を一躍、世に知らしめるとともに、映画や劇作など、ほかの分野にもその人気が波及して、世間に一大忍術ブームを巻き起こした。

本書『西郷隆盛』も、実はその影響を多分に受けた作品であった。刊行されたのは、明治四十四年十一月であり、登場する西郷は忍者でこそなかったが、立川文庫が生み出した「豪傑」を遺憾なく演じていた。

三人のあらくれから娘を助けたばかりか、その三人を訓戒して、娘をおくりとどけ、それでいて名を告げることをしてしない。猪を倒したおりに、殺生禁断であったことから、素直に名乗り出て遠島処分となる。算盤もできれば、武術・武道の腕前はいうに及ばず、忠義に厚く信義をおもんじて、行動はどこまでも正々堂々としていた。

薩摩藩主・島津斉彬の密命をおびて、京に江戸に奇想天外な活躍を演じた本書の西郷

## 西郷隆盛 [立川文庫セレクション]

---

2018年12月10日 初版第1刷印刷

2018年12月20日 初版第1刷発行

著 者 野花散人

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1763-7 2018 Nobana Sanjin, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。